

小瀬直一郎と

倉敷浅尾騒動②

小瀬直一郎が備中国倉敷へ駆けつけるきっかけとなったのは、立石孫一郎の倉敷代官所襲撃事件ですが、この立石孫一郎という人物は、播磨国佐用郡上月村（現兵庫県佐用町）の庄屋の長男として生まれ、若き日に故郷を出奔、母方の叔父である二宮村（現津山市二宮）の大庄屋・立石正介宅に寄宿します。そして、勤皇思想の篤かった叔父の影響で作州の勤皇志士と交わりを結び、勤皇思想を深めていきますが、立石家の姻戚である倉敷の庄屋・大橋家の養子となり、大橋敬之助と名乗ります。しかし、倉敷代官や商人の不正を目の当たりにして、幕府打倒の志を大きくした敬之助は、家族を残してまでも出奔、立石家の祖先の名である立石孫一郎を名乗り長州の第二奇兵隊に入隊し、指揮官を任されることになりました。しかし、ここで配下百余名を率いて脱走し、倉敷代官所・浅尾陣屋襲撃へとつながるのです。

さて、浅尾陣屋（現総社市）を襲撃した第二奇兵隊脱走部隊は、二日後の慶応二年（一八六六）四月十四



直一郎が戦死した亀島渡付近

日朝には撤退し、高梁川沿いを下っていきました。倉敷代官所関係記録によれば、この時美作からかけつきた小瀬直一郎と安東源治は、この脱走部隊が舟に乗って下ろうとしていたところを見届けて、幕府軍が集結していた玉島の陣所に報告します。そして同日夕方、脱走部隊が亀島渡（倉敷市・JR水島駅付近）で休息しているところを幕府軍が小銃で攻撃、この時、幕府軍と行動を共にしていた直一郎と源治、そして乙島村



直一郎の墓(寺和田)

（現倉敷市乙島）の庄屋の倅・又兵衛の三人は、真つ先に飛び出し、攻撃に加わるのですが、それが災いして味方の幕府軍の銃弾に当たり即死してしまいました。「備中騒動記」によれば、この三人は、紺の割羽織に袴高袴を着け、長刀を運び、いかめしいいでたちだったため、幕府兵から脱走部隊の浪士と見誤られ射殺されたとあります。血気盛んで、日頃の稽古で武術にも自信を持っていた直一郎や源治達の早まった行動が災いしたようです。

二人の亡骸は、長持に入れられ故郷へ帰着し、十九日に葬儀が行われました。そして倉敷代官所を通じて、身命を惜しまず働いた心掛けにより、十両の手当金と苗字帯刀・屋敷の租税免除を許されています。

直一郎の墓は、寺和田の小瀬家の墓地にひととき大きな墓石が建てられ、円通寺住職の竺導契の撰文が刻まれています。

一方、立石孫一郎率いる脱走部隊はその後四散し、孫一郎は数人の部下と共に長州へ戻りましたが、隊規を破って脱走した罪人として殺害されてしまいました。

幕末の変革期は、農村の庄屋や豪農層も国内外の情勢に関心をもち、武術や学問を通して様々な人と交わることによって、自身の思想を高めていきました。直一郎も孫一郎も、進む道は異なりましたが、こうした武術・学問を学んだ庄屋・豪農層の一人でした。二人は若くして不慮の死を遂げましたが、新町（香々美）の大庄屋であった中島衛や、立石正介の養子・立石岐らは、明治維新後、美作の産業や教育の振興、そして自由民権運動の指導者として、大いにその力を発揮することになります。

直一郎を賞する書状の写し
（「小鴨家文書」）

参考資料:

『鏡野町史』通史編、
『岡山県史』近世IV・津山藩文書、近世編纂物
『倉敷浅尾騒動記』
『杵形・日上山城と香々美村の暮らし』

生涯学習課 日下

電話(0868)54-7733